

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Sainte-BeuveとIdéologues
Author(s)	岡部, 喬
Citation	フランス文学, 4・5 : 6 - 11
Issue Date	1963-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040850
Right	
Relation	



Sainte-Beuve と Idéologues

岡 部 喬

I

Sainte-Beuve の生きた十九世紀前半期に、あまり忠実であるとは云えないまでも、兎に角前世紀の思想の継承者であった Des-tutt de Tracy 等の Idéologues は、今日の概論的なフランス哲学史、思想史の中では、実践的にも、理論的にも影響力の少かった一つの思想として叙べられている^①。併しながら、この様に軽視されている Idéologues 達も、Sainte-Beuve に対しては、彼のデビューした Doctorinaires の派以上に大きなインスピレーションを与えたのであった。彼は Portraits Littéraires, 第三巻の終りに次の様な言葉で自分の批評家としての経歴を述べている。《私は常に変身して行く過程の中で、最も折れ易く、断ち切られ易い精神を持ち続けてきた。私は最も進歩した十八世紀、すなわち、Tracy, Daunou, Lamarck 等の作家と生理学とによって、決然として何のためらいもなく私の批評的経歴を始めた。》^② のであると。Sainte-Beuve が自らその批評的出発点の指導者と認めている、Idéologues 達と接触するようになったのは、ここに名を挙げられている同郷の先輩 Daunou の手引きによるものである。

次いで、これらの Idéologues 達の各々から、Sainte-Beuve がどの様な影響を受け、それをどの様に咀嚼していったか述べよう。先づ最初に、Idéologues の代表者で

あると共に最も興味ある性格をもっていた Tracy と Sainte-Beuve の関係から始めることにする。この Tracy の著作は可成り長い間、Sainte-Beuve の脳裡につきまとっていた様である。強情者 Tracy と呼ばれていた。この変人は、その L'Esprit des lois の註釈で示している如く、非内向的な性格の持主ではあったが、政治・社会問題などの外的事象に対してはすぐれた感覚を具えていた。彼の所説には Saint-Simon 流の考え方や更にはマルクス主義的なかおりさえ窺われるのである。Sainte-Beuve はこの Tracy に 1822 年から 1823 年にかけて《Damiron 氏の指導下で》哲学級を修めていた頃、Valois 街のアテネ夜学校で会っている。彼はその思い出を《Nouveaux Lundis, XIII, 5.》に記しているが、それに先立って《Nouveaux Lundis, 1. 27.》の中では、《Tracy 氏は信仰を恥とし、知識を望んでいた。》^③ と誌している。この理解することの渴望と信仰放棄への傾きを助長した Tracy に対する讃嘆の念は、彼が 1827 年から 1835 年にかけて折衷派 Cousin と Jouffroy の講義に出席していた頃から薄れて来る。併しながら彼が友人 Barbe に宛てた書簡によると、この哲学を彼が完全に放棄したのではなかったことが分る。彼の内心で、二つの哲学、乃至、信念が相剋していたのではなかった。彼は 1827 年に最大の悩みを味うのであるが、それも哲学的な

前進の結果というよりも、寧ろ感情方面から由来するものであって、丁度《詩と芸術》の曲り角に立って心の惑いに苦しんでいた為である。その原因は主として Adèle Hugo に対する恋心から起った甘美なキリスト教的夢想にあると考えられる。この夢想が、悩める恋人 Sainte-Beuve に詩的な情感あふれる心情を形成したものと思われる。

Tracy と竝んで、Cabanis Lamark 等の Idéologues を Sainte-Beuve は《Volupté》のⅫ章の中で、特に Saint-Martin には数頁に亘って、回想している。そこには、好奇心をこえた一種の愛着心が流露されている。彼は Lamark を評して《彼の事物に対する見方には非常な単純性と飾りけなさとしんしさがあつた。彼はこの世界を最小の要素と変化と、最大の可能な持続力とで構成していた。彼の意見では、事物は充分な期間をかけて、持続によって自から成るのである……盲目的な長い忍耐力こそ宇宙の精髓である……私はこれら起源と終極の問題、この陰鬱な自然の眺望、これらの隠れた生命力の粗描を好んでいた。》^④と記している。併し、主人公 Amaury (=Sainte-Beuve) はこの Lamark の淋しい世界に何か柔かみが欠けていると考える。その欠けた点を、彼は Saint-Martin の著作の中に一つの啓示として発見する。《その中でも、一つの真理が僕を知らず識らず感動させ、僕に啓示を与えてくれた。それは彼が『人間は思想に生れ、思想に生きる』と教えている個處である。》^⑤この言葉に Amaury は感激して、彼の想像力は言語障礙のうちにある石材さえ忽然として生命を与える《宇宙の言葉》の靈感に参入してゆく。しかし、この Descartes 流な臭のする、万

物に思想的、道徳的意味を浸透させた哲学にどんなに感動しようとも、Amaury は Idéologues を放擲しない。彼は接神論的恍惚境にあつても、Idéologues 達に呪詛をなげかけることを決して望まなかつた。要するに、Saint-Martin は Amaury の冷やかな、苦い Idéologie を詩化したのであって、忘却せしめたのではなかつた。更に正確に云えば、Sainte-Beuve は彼が Idéologie から学んだものを、Saint-Martin によって、特異の暗示的ニュアンスで表現するのに最も適した言葉を教えられたのである。従つて Sainte-Beuve の一見して明解な叙述の中には、いつも明状し難い詩情、Martin 流の神秘主義が潜んでいる。以上で、Sainte-Beuve がデビューした当時 Idéologues から受けた影響の大凡を述べた。

II

その後、Sainte-Beuve は時の経過と共に、自己の作品の中にどのように Idéologues 達の理論を表わしていったかを見ることにする。しかしながら感覚派であり、生理学派であつた Idéologie が、彼自身の告白しているように、彼の批評の出発点であり、基調であつたとしても、他面に於て、内心的で歴史学派であつた Eclectisme との融和が彼の精神の中で行われていることは否めない事実である。従つて、彼のようにニュアンスに富んだ感情性の持主では、Idéologie 的な面にのみ問題を限つて、スポットをあてることは不可能であることを断つておきたい。

十九世紀の初頭に於て、Idéologues 達は政治的に圧迫されていたが、それでも尙、Chateaubriand 等の神秘的なカトリックに対しては依然として影響をたもっていた。

Sainte-Beuve はこれを次の様に書いている。《十八世紀の哲学は、1803年のカトリックの回復にも拘らず、鞏固な基礎をもっていたようだ。この哲学は、第一帝政下に政界より追放され、又宗門の復興を恐れていたと云うより寧ろ怒っていた。それは既にあらゆる発展段階を了え、あらゆる領域を浸透しつつしていたが、なおも理論界を支配していた。》^⑥ 1815年の Bourbons 王朝の復帰と共に、この状勢は変り、Idéologues の存在は脅かされ始めた。これを指して Sainte-Beuve は《報復の議会》、《1815年の反動》と書いている。^⑦ 文学的分野に於て、十八世紀の Condillac, Rousseau, Helvétius 等の影響の残存は後退していた。一体に、実証主義に代って宗教熱が抬頭した時期であった。学校でも、カトリック的性格の強い哲学が教えられた。これを Sainte-Beuve は《blanc écarlate》^⑧と云う気の利いた表現であらわしている。即ち《王党派の煽動政治とカトリックとの提携》を暗示しようとしたのである。

1821年2月の法令は大学の改革を「教育の根底は宗教、君主制、伝統、憲章にある。」と云う原則に基いて行った。これによって哲学は、Sainte-Beuve の言葉をかりれば、せいぜい《宗教の付添い婦人》^⑨ 位にすぎない存在となった。彼はこの点に注目して《十九世紀は宗教の復興によって始まった。》^⑩と書いている。この時代にはすべての主義が「福音書」の発展として現われたのであって、Saint-Simonisme に対しても、Sainte-Beuve はローマ神政政治の模造品であると断定している。^⑪ こうした状態が1830年頃までつづいた。カトリック的性格の哲学を唱える人達のみが、真の哲学

者と見做されていたのである。

このように Idéologie は圧迫を受けていたのであるが、Sainte-Beuve の眼には依然として真正な哲学、科学、政治学、さらには、モラル、文芸批評として映じつづけていた。換言すれば、Sainte-Beuve は Idéologie をそれがもっている多少の欠陥にも拘らず、精神や社会事象の研究に適用さるべき科学的方法と信じていたのであった。従って彼が Idéologie を称賛したのは、感情の面からではなく、理性の上であった。

Sainte-Beuve は Idéologie に取り付かれていたとはいえ、決してこの派をセクト的な眼でみていたのではない。彼が Idéologue となったのは、単に共鳴によるもの、感激によるものであって、彼独自の精神的自由は依然として持ち続けていた。その原因の一つに、彼の念頭をついぞ離れることのなかった旧師 Damiron の懐疑的傾向を挙げることが出来る。Sainte-Beuve は Idéologie の主たる欠陥を、旧態依然として新しい感覚の要求に応じて変貌することが出来なくなった点にあると考える。彼は次の様に述べている《実のところ、哲学がこのような状態に陥ってしまった時には、その出発点における価値と真理がどのようなものであっても、その哲学の終焉、退位の時期は到来しているのだ。何故なら、どんな哲学でもその名に価せんためには、たえず問題の対象とされ、誰何を受けているのでなければ存在し得ないからである。》^⑫

III

Sainte-Beuve は生来の精神的傾向から云っても、又自然に対する特異な、内面的な好奇心から云っても、Tracy, Lamark, Cabanis 等の動物学的 Idéologie に属する

人間であった。併し、彼の Idéologie との親近性が明らかに認められたのは、彼の青年時代のノートが発表された後である。Sainte-Beuve は Idéologues と同様に、思想や感情が純粹理性の作用を受けない一つの生成物であると信じていた。従って彼は感覚や習慣の役割を観察することに興味をもち、生理学者や歴史家の様に事象を眺めていたのである。そして精神的現象を肉体器官の内部にまでもとめ、その曖昧模糊たる発生状態を描いて見せた。Cabanis の年令、性別、病氣、気温等の思想、感情に及ぼす影響の研究の類こそ、Sainte-Beuve の批評方法の主要な一部を成しているものではないであろうか。彼が博物学的観察の習慣を収得し、生来の心理的・生理学的研究態度に傾く本能を磨いていったのは、Cousin, Jouffroy の影響ではなくて、恐らく青年期に Idéologues の著作に親んだためである。そう考えることによって、彼が己の天職に従って決意したと言っている医学学校への入学が説明可能なものとなる。それと共に、1820年代彼が未だ哲学級に在ったときの生理学、化学、博物学の講義を受け、Valois 街のアテネに通っていた事実を考え合す必要がある。この読書と講義の二つの事実は、Sainte-Beuve の Idéologie への傾倒に甚だ暗示的なものを示している。

後年、Sainte-Beuve が「精神の博物誌」の発展に寄与することを思い至った時、彼は恐らく己の青年時代にとって懐しい存在であった Idéologues 達の言葉を代弁したのであり、彼等の大望と方法を己のものとして成し得たのであると言い得られる。Sainte-Beuve は批評の題材を広く、哲学、生理学、文芸等から採っているのは、分析

と註釈とで物質界の展望を弘めた人のみが学者と呼ばれるべきではなくて、更に考える人、感じる人、即ち自然の風景や人間の能力や肉体の悲劇を書いた哲学者・詩人・小説家も等しく学者であることを我々に認識せしめようとしている観さえ与える。Sainte-Beuve の博物学的批評は全体的にみれば思想の起源と形成を探究した Condillac の線に沿って成されたと解釈することも可能である。彼自身、自分の意図がそこにあったことを諸処に記している。勿論彼の場合には、Condillac に較べて Idéologues の生理学によって概念が一層明確化されていることと、加うるに人間性が豊かであることの二つの相違を指摘しなければならない。Sainte-Beuve は、1828年頃から既に、個々の作家をその土地、その現実の生活に結びつけようとする意図をもっていた。^⑩ Balzac の死の直後に発表された、1850年の評論の中で、彼は《作家の生理学と衛生学は、その才能を分析する場合に欠くことの出来ないシャピートルの一つとなった。^⑪》と書いている。更に彼は1852年に、これと同様な考察を、Lamarck とその生理学について回想した末尾に誌している。《私は採集する。私は精神の博物学者だ。私が打ち立てようとしているものは文学の博物誌である。》^⑫ 1862年には、《彼は文学、文学作品は私にとって、それを作した人間と組織から別個なものではない、少くともこれらを切り離すことはできない。私は一作品を賞味することはできても、その人物そのものの知識とは無関係に作品を判断することは困難である。私は好んでこう言う、この本にして、この実ありと。文学研究はこのように私をして必然的に精神研究に向

わせたのである。》^⑩と告白している。Sainte-Beuveが、個々の作家の中に求めたものは、現実の人間であって、彼の人間に対する好奇心はどの批評記事にも強く現われている。

IV

最後に Idéologue としての Sainte-Beuve が我々に示しているものを要約して挙げることにする。但し Sainte-Beuve の様な精神構造の持主にあつては、一面を決定的に浮彫りすることは困難であつて、推論的結論とならざるを得ないが、彼は Idéologue としての出発点から次の様な確信をもっていたのではないかと思われる。即ち、彼の詩的情緒と科学的観察の二つは、感覚の世

界に於ては同一の閃きによって生起し、且つ究極に於て可視的な一つの現象を知り、表現したいと云う同一の欲望から由来すると信じていた。従つてこの二つは同じ範疇に属するものであるから、素材はその本質・組織を知ることによって、精神的段階まで高め得られる。この様にして得た新知識は各人の感受性の中に、新しい文学的テーマを、モラルを、少くとも新しい好奇心を喚起することが出来る。さらに飛躍すれば、旧来の哲学的素地から解放された人間を作り出すことが出来るという抱負を Sainte-Beuve は青年時代からいだけ続けていた様に思われる。

《Notes》

- ① 例へば、：Cresson の *Courants de la pensée philosophique* には彼らのことは述べられていない。：Bédier-Hazard の *Littérature française* の中では、折衷派 Cousin の *Idéologues* に対する態度を説明する為には彼らは登場するに過ぎない。
- ② 《Je suis l'esprit le plus brisé et le plus rompu aux métamorphoses, j'ai commencé franchement et crûment par le XVIII^e siècle le plus avancé, par Tracy, Daunou, Lamark et la physiologie.》
- ③ 《M. de Tracy était humilié de croire; il voulait savoir.》
- ④ 《Sa conception des choses avait beaucoup de simplicité, de nudité, et beaucoup de tristesse. Il construisait le monde avec le moins d'éléments, le moins de crises, et le plus de durée possible. Selon lui, les choses se faisaient d'elles-mêmes, toutes seules, par continuité, moyennant des laps de temps suffisants... Une longue patience aveugle, c'était son génie de l'univers... J'aimais ces questions d'origine et de fin, ce cadre d'une nature morne, ces ébauches de la natalité obscure.》
- ⑤ 《Une vérité entre autres m'y touchera insensiblement, et fit révélation en moi; c'est l'endroit où il est dit que l'homme naît et vit dans les pensées.》
- ⑥ 《La philosophie du XVIII^e siècle, malgré la reprise catholique de 1803, semblait fermement assise: cette philosophie qui avait parcouru toutes ses phases et pénétré toutes les sphères, évincée du monde politique par l'Empire, irritée bien plutôt qu'effrayée du rétablissement des autels, restait maîtresse en théorie.》 *Portraits littéraires*, III. 469.
- ⑦ 《la chambre de représailles》, 《la réaction de 1815》 *Nouveaux lundis*, IV. 238-239-247.

- ⑧ Nouveaux lundis, IV, 253.
- ⑨ «la dame de compagnie de la religion». Nouveaux lundis, IV. 407.
- ⑩ «le XIX^e siècle a débuté par une renaissance religieuse» Nouveaux lundis, IV. 407.
- ⑪ Nouveaux lundis, IV. Article sur Lacordaire, 23 mars 1863.
- ⑫ «A vrai dire, quand une philosophie en est arrivée là, quelles qu' aient pu être sa valeur et sa vérité au point de départ, il est temps qu'elle finisse et soit détrônée; car toute philosophie, digne de ce nom, n'existe qu'à la condition d'être sans cesse en question, sur le Qui-vive...» Portraits littéraires, III, 468 et s., 1847.
- ⑬ Portraits littéraires, I, 29.
- ⑭ «La physiologie et l'hygiène d'un écrivain sont devenues un des chapitres indispensables dans l'analyse que l'on fait de son talent.» Causeries du lundi, II, 448.
- ⑮ «J'herborise, je suis un naturaliste des esprits. Ce que je voudrais constituer, c'est l'histoire naturelle littéraire.» Portraits littéraires, III, 546.
- ⑯ «La littérature, la production littéraire n'est point pour moi distincte, ou du moins séparable du reste de l'homme et de l'organisation; je puis goûter une oeuvre, mais il m'est difficile de la juger indépendamment de la connaissance de l'homme même; et je dirais volontiers: tel arbre, tel fruit. L'étude littéraire me mène ainsi tout naturellement à l'étude morale.» Nouveaux lundis, III, 15.